

総括 グローバル化時代の台湾の生涯学習と言語学習の展望

第1部「台湾における生涯学習と言語学習の意義」では、フレイレの生涯学習理論を理論的枠組みとして踏まえた上で、生涯学習において言語学習が有する意義・役割について、台湾の固有の歴史に即して検討がなされた。第1章「生涯学習における言語学習の位置」では、17世紀のオランダ、スペインによる占領以来、外来政権に支配され、日本統治下においては日本語、国民党統治下においては北京語が「国語」として強要されてきたという台湾の歴史的状況、また原住民（1994年以降の台湾における法的名称、現在12族が認定されている）、閩南人、客家人、本省人という4大エスニックグループが存在し、それぞれがその「母語」を有するという文化的・社会的状況が概観されている。そして、台湾において生涯学習の中で言語学習がいかに重要な位置を占めるかという問題意識の提起がなされている。第2章「『ポストコロニアル』の時代における言語教育と台湾人の意識構造—P.フレイレの思想に留意しつつ」では、ブラジルの教育者フレイレの識字教育と対話教育による意識覚醒、文化振興の理論が台湾の言語状況において重要な示唆を与えることが指摘されている。第3章「台湾における生涯教育の歴史」においては、各エスニックグループの歴史的、社会的状況について、また日本統治時代以来の社会教育政策の歴史について、及び高齢者教育を中心に台湾の生涯学習の現況について論じられている。第4章「台湾における高齢者の生涯学習と『長青学苑』」においては、とりわけ高齢者の学習機関である「長青学苑」における生涯学習の状況について論じられている。

第2部「台湾における言語教育とエスニシティ、アイデンティティの問題」では、台湾の言語教育の歴史について、及び1987年「戒厳令解除」以降の台湾における言語的、文化的状況について論じられている。第5章「台湾における言語教育の歴史」においては、各外来政権下の言語教育史が概観され、さらに国民党政権下の戒厳体制時代の言語教育政策、戒厳解除以降の言語教育政策が論じられている。第6章「言語と文化—エスニシティとアイデンティティの諸問題」では、戒厳令解除後の状況における郷土言語運動、郷土文化運動、多元化・分権化・「本土化（台湾化）」において特徴づけられる教育改革の展開、及びエスニックグループのアイデンティティ復興の問題が論じられている。また、各エスニックグループのアイデンティティと同時に台湾人としてのアイデンティティが台頭してきたことが示され、その意義が論じられている。

第3部「台湾における各エスニックグループの言語生活と言語意識」においては、筆者の独自の調査に基づく考察がなされている。第7章「各エスニックグループにおける言語使用状況」では、質問紙による各エスニックグループにおける言語の精通度、状況別の言語の使い分け、学びたい言語と学びたい理由についての調査結果が考察される。若い世代になるほど国語常用者が多くなっていること、外国語学習への意欲がグローバル化の意識とともに高いこと等がそれにより明らかにされる。自由回答からは、国語と母語の学習、さらに外国語学習をいかに進めるべきかが台湾の人々の重要関心事であり、かつその方針については多様な見解があることが明らかになっている。言語の問題の文化との

関わり、エスニックグループ間の分裂と統一の問題との関わりに言及する事例も示されている。これら調査結果は、主として、教育とマスコミによる「国語環境」の形成、その中での高齢者世代の教育機会を逸した人たちの立ち後れ、近年における本土化の動き、グローバル志向等の観点から解釈されている。第8章『「長青学苑」における言語学習の展開』においては、「長青学苑」における言語学習の状況について、カリキュラムと履修状況の実態調査、受講生に対する聞き取り調査の結果が示され、考察がなされている。高齢者の言語学習意欲が高いこと、言語の中では、英語、日本語、ついで国語が多く履修者を集めていること等が明らかにされる。聞き取り調査からは言語政策、言語学習についての様々な見解が明らかにされるが、中には家族とのコミュニケーションに困難を感じ、国語あるいは母語を学んでいるという事例も含まれている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、台湾における生涯学習と言語学習の歴史的展開について、生涯学習論、社会教育学、言語教育政策、教育史等関係する諸分野の先行研究を踏まえつつ、これを総合的に論じ、かつ質問紙調査、聞き取り調査によりその現在の状況を把握しようとする意欲的な試みであると言える。

第1部「台湾における生涯学習と言語学習の意義」、第1章「生涯学習における言語学習の位置」では、長く外来政権に支配され、日本統治下においては日本語、国民党統治下においては北京語が「国語」として強要されてきたという台湾の歴史的状況、また原住民（台湾における法的名称）、閩南人、客家人、本省人という4大エスニックグループが存在し、それぞれがその「母語」を有するという文化的・社会的状況が概観されている。そして、台湾において、生涯学習の中で言語学習がいかに重要な位置を占めるかという問題提起がなされていると言える。第2章「『ポストコロニアル』の時代における言語教育と台湾人の意識構造—P.フレイレの思想に留意しつつ」では、ブラジルの教育者フレイレの識字教育と対話教育による意識覚醒、文化振興の理論が台湾の言語状況において重要な示唆を与えることが指摘されている。第3章「台湾における生涯教育の歴史」においては、各エスニックグループの歴史的、社会的状況について、また日本統治時代以来の社会教育政策の歴史について、及び高齢者教育を中心に台湾の生涯学習の現況について論じられている。第4章「台湾における高齢者の生涯学習と『長青学苑』」においてはとりわけ高齢者の学習機関である「長青学苑」における生涯学習の状況について論じられている。

以上、第1部では、その固有の歴史的、社会的状況の考察から、台湾における生涯学習にあっては言語学習、言語教育がきわめて重要な意義を持つという観点が示されている。また、フレイレの生涯学習理論を踏まえることにより、第2部で論じられる近年の言語問題を中核とする文化運動、教育改革運動を意識覚醒、文化振興あるいは復興の運動として意義づける理論的視座を得ていると言える。

第2部「台湾における言語教育とエスニシティ、アイデンティティの問題」では、台湾の言語教育の歴史について、及び1987年「戒厳令解除」以降の台湾における言語的、文化的状況について論じられている。第5章「台湾における言語教育の歴史」においては、各外来政権下の言語教育史が概観され、さらに国民党政権下の戒厳体制時代の言語教育政策、戒厳解除以降の言語教育政策が論じられている。第6章「言語と文化—エスニシティとアイデンティティの諸問題」では、戒厳令解除後の状況における郷土言語運動、郷土文化運動、多元化・分権化・「本土化（台湾化）」において特徴づけられる教育改革の展開、及びエスニックグループのアイデンティティ復興の問題が論じられている。また、各エスニックグループのアイデンティティと同時に台湾人としてのアイデンティティが台頭して

きたことが示され、その意義が論じられている。

以上、第2部においては、言語教育史を踏まえた上での戒厳令解除以降の言語運動、文化運動の意義づけが試みられ、国語強制から郷土言語重視へという政策的、社会状況的展開が明確にされている。あわせてそれがエスニックグループのアイデンティティと文化の復興運動として展開されていることが論じられている。

第3部「台湾における各エスニックグループの言語生活と言語意識」、第7章「各エスニックグループにおける言語使用状況」では、質問紙による各エスニックグループにおける言語の精通度、状況別の言語の使い分け、学びたい言語と学びたい理由についての調査結果が考察される。若い世代になるほど国語常用者が多くなること、外国語学習への意欲がグローバル化の意識とともに高いこと等がそれにより明らかにされる。自由回答からは、国語と母語の学習、さらに外国語学習をいかに進めるべきかが台湾の人々の重要関心事であり、かつそこに多様な見解があることが明らかにされている。言語の問題の文化との関わり、エスニックグループ間の分裂と統一の問題との関わりに言及する事例も示されている。これら調査結果は、主として、教育とマスコミによる「国語環境」の形成、その中での高齢者世代の特に教育機会を逸した人々の立ち後れ、近年の本土化の動き、グローバル志向等の観点から解釈されている。第8章「『長青学苑』における言語学習の展開」においては、「長青学苑」における言語学習の状況について、カリキュラムと履修状況の実態調査、受講生に対する聞き取り調査による結果が示されている。高齢者の言語学習意欲が高いこと、言語の中では、英語、日本語、ついで国語が多く履修者を集めていること等が明らかにされる。聞き取り調査からは、言語政策、言語学習についての様々な見解が明らかにされるが、中には家族とのコミュニケーションに困難を感じ、国語、あるいは郷土言語を学んでいるという事例も見られる。

以上、第3部は、台湾における言語生活状況、言語意識についての実態調査として、重要な資料であると言える。解釈の視点も、第1部、第2部の考察を踏まえ、明確である。また、特に家族内で使用言語が異なるためコミュニケーションの困難が生じているという現実が浮き彫りにされていることは、台湾における高齢者の言語生活状況の特徴を示すものとして意義深いと言える。

台湾においては、国語以外の言語にも関わる教育、生涯学習は、従ってそれらを主題とする研究は、戒厳令解除後に初めて本格的に可能となった。そのような研究状況の中で、本論文は、この分野の現時点における総括的研究の意味を持つものとして評価できるものである。また、台湾の生涯学習の今後の展開について、あるいは言語生活状況、言語意識のさらに詳しい実態やその今後の変化について、本論文は、筆者の研究の発展を期待させるものである。従って、本審査委員会は、許容敏を本学博士（文学）の学位を授与するに十分な資格を有するものと判断する。